

青年期におけるヌミノーゼ体験 と顕在性欲求との関係

——臨床心理学的観点から——

佐 伯 和 香 子

目 次

1	目的と問題
1-1	目的
1-2	目的の背景
1-3	先行研究の問題点と本研究の位置付け
1-3-1	先行研究の問題点
1-3-2	本研究の位置付け
1-4	本研究の基礎となる理論的枠組みと用語の定義
1-4-1	本研究の基礎となる理論的枠組み
1-5	仮説の設定
2	方法
2-1	対象者と調査時期
2-1-1	調査の対象者
2-1-2	調査の時期と場所
2-2	調査方法の妥当性と信頼性
2-2-1	内容的妥当性
2-2-2	概念的妥当性
2-2-3	信頼性
2-3	調査結果の整理方法

3	結果と考察
3-1	項目別の結果と考察
3-2	仮説の検証に関する考察
3-3	総合的考察
4	結論と今後の課題
4-1	結論
4-2	今後の課題

1 目的と問題

1-1 目的とその背景

本研究における目的は二つある。第一の目的は、ヌミノーゼに関する質問紙を大学生に行い、青年期におけるヌミノーゼ体験の内容と特徴を明らかにすることである。第二の目的は、上記のヌミノーゼに関する質問紙とあわせて EPPS (Edwards Personal Preference Schedule) を行うことで、体験の有無と顕在性欲求との関係を明らかにすることである。これらの分析を通じて、ヌミノーゼが個人に引き起こす、意識の変容について考察していく。この意識の変容は、臨床場面においてクライアントが体験する変容と何らかの共通点があると考え、変容についての臨床心理学的視点から考察を進めたい。

1-2 仮説の設定

仮説1) ヌミノーゼ体験者は親和・他者認知・養護の尺度得点が高いだろう。

仮説2) ヌミノーゼ未体験者は親和・他者認知・養護の尺度得点が低いだろう。

仮説3) ヌミノーゼ体験者はヌミノーゼ体験に対してで肯定的な理解を示すだろう。

仮説4) ヌミノーゼ未体験者はヌミノーゼ体験に対し肯定的な理解を示さないだろう。

2 方法

2-1 対象者と調査時期

京都地域の18歳から25歳のA大学の学生48名とB大学の学生59名のあわせて一〇七名(うち男性33名・女性72名・無記入2名)に対して行った。調査の時期と場所は以下のとおりである。二〇〇三年一月にA大学の学生はA大学で講義時間内にヌミノーゼに関するアンケート調査を実施した。B大学の学生は協力者にヌミノーゼに関するアンケートとEPPS性格検査を配布し、一週間後に回収する形で調査を実施した。

3 結果と考察

3-1 仮説の検証に関する結果と考察

(1) 仮説①②の検証

ここでは体験者と未体験者のEPPS性格検査の得点を分析する。まず、全体の平均値を出し、各項目の得点を平均以上と平均以下に

青年期におけるヌミノーゼ体験と顕在性欲求との関係

二分し、体験者と未体験者の間に有意差があるかどうかを検定した。結果、は表2・3にあるように、 $P<0.5$ ではすべての項目において差は見られなかった。よって仮説①②は支持されなかった。しかし、「秩序」においては、未体験者のほうが得点が高いと控えめにはあるが、認めることができると思われる。

体験者群は未体験者群よりも計画を立てて秩序だった生活をしたという欲求が少ないということから、二つのことが考えられる。ひとつは、「きちんと秩序だったこと」に欲求やこだわりがないので、非日常的なヌミノーゼ体験を抵抗なく受入れやすかったために、体験者群の秩序欲求が有意に少なかったということである。もうひとつは、1-6仮説の設定で仮定したように、EPPSの得点の差がヌミノーゼ体験による変容であると考え、ヌミノーゼ体験が秩序欲求の低下を導くというものである。ヌミノーゼの本質は、Otto (一九一七) がのべているように、「言葉では説明できない感情」である。このような体験をすることによって、「秩序だった行動、計画的行動をしたい」というこだわりが減じることは考えられる。しかも、もちろんこのEPPSの結果からはヌミノーゼ体験が秩序欲求の低下を起こすと因果づけて断じることはいできない。

(2) 仮説③④の検証

体験者は自身の体験を積極的に肯定的体験と考える人が多いとはいえないが、否定的体験として捉える人は少ないことがわかった。

4 結論と今後の課題

4-1 結論

本研究の結果においては宗教（いわゆる組織をともなう宗教）や信仰心の有無と、ヌミノーゼ体験の有無には関連性が低いと思われる。この結果から、今回ヌミノーゼ体験として挙げられた体験が、ヌミノーゼ体験といえるのかという疑問が持ち上がる。元来Otto（一九一七）が提唱した「ヌミノーゼ」は、キリスト教世界であるドイツで、純粹で強烈な「宗教体験」に伴う、説明できない感情を述べたものである。本研究で挙げられた内容は、自然や芸術に接した体験が多く、その意味で言う宗教体験とよぶには未成熟であるといえよう。しかし、それだけをもつてこれらの体験がヌミノーゼ体験ではないと断じるのも難しい。ヌミノーゼの10要素すべてではないが、これらの体験にもヌミノーゼ的要素が見られた。また、有意とはいえないまでも、「他者在」を感じる割合は多く、これらのことから本研究で得られた感情体験は宗教性に関わりのある感情体験であると考えられる。ここでのいう宗教性とは、本調査からもわかるように、既存の、また特定の団体をもった宗教を指すものではない。しかし、特徴として、「畏怖」や「不気味」「不浄」といった感情を体験した人が少なかったことが挙げられる。ここで、ヌミノーゼという概念が生まれた風土に着目する必要がある。ヌミノーゼは1神教のキリスト教世界で生まれた概念であり、そのままは受け入れられない

ということも考えられる。根連れるな神存在を訴えるキリスト教と、日本の風土が育んだカミとの特性の違いが、このような穏やかな「平安」を多く感じる体験を導くことが、あるかもしれない。堀（一九九三）は日本の仏教、神道について、「やさしさ、おだやかさ、日本的ないろいろな矛盾をもちながら、しかも、それをひとつに調和させていくような厳しさのない母性的なものをもっている」(p.211)と日本の宗教と風土について言及している。1神教を受け入れる心的世界をもち、自然と対立するのではなく、共に暮らしてきた日本人のヌミノーゼ体験を考える必要があるのではないだろうか。

4-2 今後の課題

本研究では体験者と未体験者におけるEPPSの結果の差異が、ヌミノーゼ体験のよつてのものなのか、この差異がヌミノーゼ体験をしやすい性格特性なのかを明らかにすることができなかった。ヌミノーゼ体験の前後に調査を行い、時系列的研究を行うことが必要だと思われる。ヌミノーゼ概念を日本の風土を視野に入れて捉えなおす試みが必要であろう。また、ヌミノーゼ体験と臨床場面での「癒し」の体験との異同を調査していく必要があると思われる。心理学と宗教の境界領域について研究することで、臨床場面で宗教体験をどのようにあつかっていくべきであるのか、その効用と限界を探っていく試みも必要であると思われる。